
東京中野区、非日常。

馬宮レンナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京中野区、非日常。

【Nコード】

N7307Z

【作者名】

鷹宮レンナ

【あらすじ】

東京都、中野区舞台の非日常系ライトノベル。

元ひきこもりの少女が主人公の、常識が通用しないような、そんなお話。

少女を取り巻く人物と、一見普通の非日常。それらを少女の視点から語ります。でも稀に他の人物や、第三者からの視点もあるかもしれません。

まあ、軽い気持ちで読んで頂ければ……幸いです。

プロローグ

数年ぶりに、外に出た。

ひきこもりでいるのはやめようと思って、思い切って外に出てきたら、数年前とは景色が違った。当たり前なんだけれど、どうにも少し納得がいかなかった。

よく連れていってもらったデパートも、真新しくなっていた。きつと、一度改装工事をしたのだろう。屋上にあつた遊具たちはもうなかった。ここで確かに遊んでいたはずなのに。そう思うと、ちよつと悲しくなつた。

よく行つていた菓子屋はまだやっていて。店主こそ変わつていたものの、数年前と変わらなかつた。そこでちよつと、ほつとしたわたしが居る。

その他のものは思つたより変わつていなかつた場所も多かつた。ドーナツをメインに売っている喫茶店や、有名ファーストフード店などは昔のままだつた。少し店舗を改装した場所もあつたけれど。

しばらく歩き回つた後、携帯を取り出し友人に電話をかける。数秒間、コール音が続いたが友人はすぐに電話に出てくれた。ちよつとだけ嬉しかったのと、しばらく人と話していなかつたから少し緊張した。

「もしもし?」

「もしもし。十七夜^{かたなぎ}だけど……つーくん、この街の案内してもらつていいかな? 今お寿司屋さんの前なんだけど……」

「あ、おう、いいぜ、今から行く」

その言葉とともに、電話が切れた。快く……かどうかわからないけど、すぐに来てくれると言つたあたり、友人 誠^{まこと}、もといつーくんは、わたしのことをプラスの存在として見てくれているのかもしれない。ちよつと自意識過剰かもしれないけど。

お寿司屋さんの前で、近くにあるゲームセンターや薬局をちらちら

と見ながらつーくんを待つ。一見小学生にしか見えないうなわたしが、冬のこんな時間　それも四時にここに居るのは危ないのかもしれない。辺りはだんだんと暗くなりかけている。元ひきこもりだからそんなに体力もないし、何かされれば一発でノックダウンしてしまう。

そんな、くだらない事を考えているうちにつーくんはやってきた。

でも彼の服装がおかしい。冬、それも真冬なのに、半袖短パン。十歳の成人近い男の子が真冬に半袖短パン。小学生なら許せるんだろうけど、これは流石におかしいんじゃないか。なんて思ったけれど、つーくんはこんなわたしに、変化したこの街を案内してくれるというのだから、決して口には出さない。

「……しっかし、お前がようやく脱ひきこもりとはなあ……嬉しいぜ」

「えへへ、お外に出てみたくなっただけだけどね。……ごめんね、付きあわせちゃって。ありがとう」

「どういたしまして。そんなん平気だよ、俺も仕事入ってこないしつーくんの言う仕事は、なんでも屋だ。つーくんはなんでも屋をしていて、殺しとかあぶないおくすりの販売とかのような危険なこと以外のことならなんでも引き受ける仕事をしている。しょっちゅう誰かを無理矢理引きずり回して仕事をしていることが多いとネットのある掲示板じゃ噂になっていた。それは本人も認めてるみたいだったけど。」

身長百三十五センチの十九歳の女の子と、身長百五十六センチの十九歳の男の子。それは紛れも無くわたし達のこと、周りから見れば小学生と中学生のコンビに見えるのだろう。でもわたしは発達障害らしくて、外見の成長が止まっちゃってるだけだし、つーくんは兄弟に似て背が小さいだけ。

でもこの小さな身長は目立つといえは目立つし、青緑の髪をおさげのツインテールにしている青目の女の子と、アルビノで髪を結って

いる華奢な男の子とかいう髪色とかの身体的特徴も目立つ。というか、目立たないほうがおかしいのかもしれない。

そんなことを考えていると、つーくんが口を開いた。

「んでさ、十七夜。この街の案内っつーか、観光ついでにゲーセンでも寄らないか？」

「あ、いいよー。なんなら、案内はやめてゲーセンで遊びほうけるのもいいよ？」

「マジで？ それじゃあそうしたいんだけど……」

「うん、へーきへーきっ！」

そう言っつーくんと一緒に、しばらく歩けば大きいゲームセンターへ入っていく。

コインゲームだとか、スロットだとか……そんなものもたくさんあって、大人も満足するまで遊べそうな雰囲気だった。

こういうところでやるゲームはきまってるアーケードゲーム。レーシングから格闘ゲームまでいろんなものがあるけれど、わたしは音楽ゲーム派。最近は四角いパネルに触れる音楽ゲームや、ネットじゃ有名な歌姫の音楽ゲームにハマってたたり。

でも、わたしはまだ知らなかった。

まさかこのゲームセンターから、非日常という沼に沈んでいくなんて、思っつてもいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7307z/>

東京中野区、非日常。

2011年12月24日07時20分発行